

大井町史料第30集

HIGASHI DAI SITE
東 台 遺 跡

(第5地点の調査のあらまし)



1984.3

埼玉県大井町史編さん委員会

は じ め に

大井町の町史編さん事業として、原始古代部門においては、縄文時代の集落を系統的に発掘調査してその構成を明らかにするため昭和58年度は東台遺跡の縄文中期の遺跡を主として調査しました。

今回は、町内の遺跡の中でも、比較的保存状態のよい地点を選び調査してきました。

調査報告ということでは、とりわけ町民の皆さまに親しみ易く、かつわかりやすくという点に留意し、写真を本文中に多くくみ込み、編集してきました。

詳細な検討、考察は大井町史「通史編」・「資料編」にゆずりますが、このたび調査報告書を作成しましたので、町史へのご理解をさらに深めていただければ幸いです。

最後に、発掘調査を快諾して下さった地主さん、及び今回の調査に協力いただいた人々に対して、厚く感謝の意を申しあげます。

昭和59年2月

大井町史編さん委員 小 泉 功

例 言

1. 本書は大井町史編さん事業の一環として発掘調査を実施した東台遺跡（大井町大字大井東台に所在）の第5地点の発掘調査報告書である。
2. 東台遺跡の発掘調査は、大井町史編さん委員会原始・古代部門の調査研究の一環として、東台遺跡における縄文時代の集落・古墳時代～平安時代の遺構の確認を行なっていくために実施した。
3. 発掘調査は大井町史編さん委員会が調査主体者となり、小泉功・坪田幹男が担当し、昭和58年7月25日～同年8月9日まで調査を実施した。
4. 発掘調査にあたっては土地所有者である野溝繁樹氏・大隅康雄氏・野溝繁枝氏の御理解と御協力を得た。記して感謝いたします。
5. 本書の執筆は担当者があたったが、第Ⅳ章は清水象次郎があたった。
6. 本書の編集は小泉功・坪田幹男が行ない、図版の作成は坪田幹男が担当した。
7. 発掘調査、整理については、下記の皆さんの御協力によりなったもので記して謝意を表します。（敬称略）

（発掘調査）

石垣仁・石森研司・柿沼一成・草野クニ子・鈴木信也・鈴木敏・橋本康一・長谷川健次
平田丈英・本田仁志・森英隆・矢内公朗・山田寛和・山本和宏・脇谷尚樹

（整理作業）

石垣ゆき子・稲川洋子・猪瓜ともよ・小栗久子・須藤さち子・柚木嘉図子・中田藤子
矢内明子・米倉やす子

目 次

はじめに

例言・目次・挿図目次・図版目次

I 遺跡の立地と環境	2
II 調査の経過	7
III 発見された遺構と遺物	
5号住居址	8
6号住居址	12
土 壙	25
IV 東台付近の地形	27
V ま と め	31

挿 図 目 次

第1図 東台遺跡周辺の地形と調査区(5000)	3
第2図 東台遺跡周辺の地形(5000)	5～6
第3図 遺構分布図(500)	8
第4図 5号住居址・土壙(50)	9
第5図 5号住居址出土土器(1/4)	10
第6図 5号住居址・土壙出土土器(1/3)	11
第7図 6号住居址(50)	13
第8図 炉 址(50)	13
第9図 6号住居址遺物出土状態(50)	14
第10図 6号住居址出土土器(1)(1/4)	15
第11図 6号住居址出土土器(2)(1/4)	17

第12図 6号住居址出土土器(3)(1/3)	19
第13図 6号住居址出土土器(4)(1/3)	20
第14図 6号住居址出土土器(5)(1/3)	21
第15図 6号住居址出土土器(6)(1/3)	22
第16図 6号住居址出土石器(1)(1/3)	23
第17図 6号住居址出土石器(2)(1/3)	24
第18図 遺構外出土土器(1/3)	26
第19図 東台遺跡周辺の地形断面図	27

図 版 目 次

PL. 1 遺跡遠景	2
PL. 2 遺跡近景	2
PL. 3 第2地点の調査	4
PL. 4 第4地点の調査	4
PL. 5 発掘調査風景	7
PL. 6 5号住居址	8
PL. 7 5号住居址出土土器	10
PL. 8 6号住居址	12
PL. 9 6号住居址遺物出土状態	13
PL.10 6号住居址出土土器	15
PL.11 6号住居址出土土器	16
PL.12 6号住居址出土土器	18
PL.13 6号住居址出土石器	23
PL.14 土 壙	25
PL.15 ローム中の鉾物	28

I 遺跡の立地と環境

本遺跡は、大井台の北向きの台地へりに帯状に分布する町内ではもっとも南側に位置している、先土器・縄文時代を主体とする遺跡である。この大井台と低地との比高差は約10mを測り、町内では唯一武蔵野台地らしい起伏の変化を見つけることのできる土地でもある。台地のすそには、現在西から東へ砂川堀が流れている。砂川堀に沿った台地上のへりには、本遺跡以外にいくつかの遺跡が確認されている。本遺跡よりさらに西方には西台・小田久保の両遺跡が存在する。砂川堀の旧路は現在ではその名残りをとどめていないが、もともとは台地のすそを流れていたものではなく、北西側を現在の流れとほぼ平行に流れていた。現在の砂川堀の流路は隣接する三芳町分の「トウハチヤマ」と呼ばれる台地下から湧出する地下水が川となって西から東へと刻んでいたもので、東台遺跡の北側の井戸のところで旧砂川堀と「トウハチヤマ」から流出する地下水による川が合流しているものであった。後者の方をソネ（曾称）川と呼ぶ古文書もみうけられるようである。

さて、遺跡の現状は、主に畑地と山林であるが、北向きの斜面上にはヒナ段上に建設された住宅が遺跡の東側に密集し、他に虫喰い状態に除々に宅地化がすすんでいるが、遺跡全体から見れば町内の遺跡の中ではまだ保存はいい方である。

本遺跡は、これまでに4地点で発掘調査を実施してきている。第2地点を除き、1・3・4地点では、今回の第5地点と隣接しての調査である。昭和56年夏の調査である第1地点ではトレンチ発掘を実施した。町史編さん事業の一環としての発掘調査であったが同地点での遺構の検出はできなかった。縄文時代中期の土器を含む包含層は確認できた。同年12月に実施された第2地点は、開発行為に対処するために事前に発掘調査を行なった箇所であり、先土器時代～縄文時代の遺構・遺物が確認された。とりわけ縄文時代中期の住居址が



PL. 1 遺跡 遠景



PL. 2 遺跡 近景

I. 遺跡の立地と環境



第1図 東台遺跡周辺の地形と調査区 (1/5000)

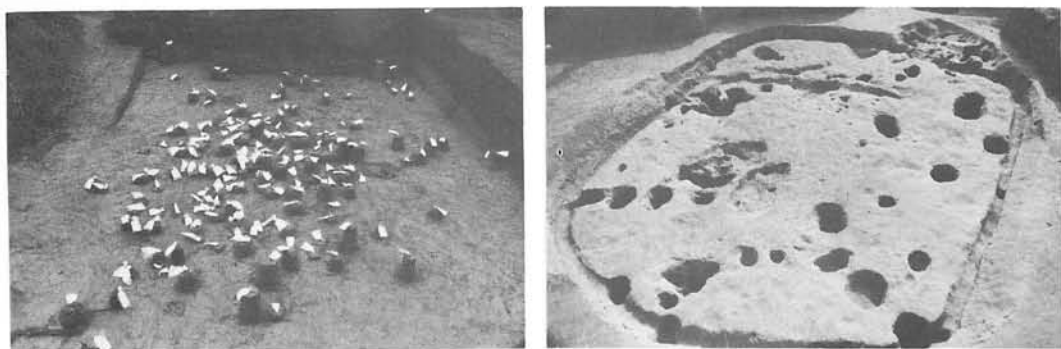


PL. 3 第2地点の調査

わずか667㎡の調査面積から12軒検出されるなど多くの成果があがっている。主体となる時期は加曾利EⅠ式期である。続く第3地点は昭和57年6月の調査で、斜面上にかかっていたが縄文時代中期の遺物と柱穴を発見した。第4地点では、先土器・縄文・平安時代の遺物・遺構を検出できた。先土器時代では第Ⅲ層から第Ⅴ層上部にかけて総数567点の石器・剥片を検出。町内ではもっとも集中して出土した。また縄文時代では中期後葉と後期初頭の住居址が計四軒検出。今回の第5地点と北側で隣接し、今回発見された遺構とも大きな関連があり、集落の把握には不可欠の資料となっている。また溝状遺構の覆土上部から須恵器の坏、甕、土師器の甕破片等が出土したが、遺構は検出できなかった。

以上、4地点での調査の成果を概観してきたが、今回の調査の目的は、第4地点の南側を調査区として選定し、縄文時代中期の集落、特に住居址の配置・分布をみることに同時に、町内で空白の時代である土師器・須恵器を伴出する遺構の確認をすることが大きなものであった。調査結果については本文中を参照していただくが、今後も目的・意識的に課題を追求し、資料の収集・蓄積にあたると同時に保存のための、より実証的な資料の確保にも努力していきたい。

(坪田 幹男)



PL. 4 第4地点の調査

I. 遺跡の立地と環境



第2図 東台遺跡周辺の地形 (1/5,000)

Ⅱ 調査の経過

昭58・7・25

表土はぎ作業。

58・7・27

暗褐色を呈したおちこみを確認。

58・7・28

住居址2軒のプランを検出する。

58・8・2

5号住居址と土塙の調査にかかる。

住居址は十文字に土層観察用のベルトを残す。住居址の壁ぎわで底部を欠く埋甕を確認。

58・8・3

炉体土器を検出。

58・8・4

6号住居址の調査にかかる。覆土中より黒曜石数点出土。5号住居址は測量を終える。

58・8・5

6号住居址から炉体土器及び埋甕を確認。

58・8・7

6号住居址の土層図・平面図を作成する。

58・8・8

6号住居址の炉は石皿の破片などによって囲み炉になっている。

58・8・9

ハンドオーガーによる地質調査を終え、全ての調査を終了する。



PL・5 発掘調査風景

Ⅲ 発見された遺構と遺物

5号住居址(第4～6図)

規模と形態：長径4.6m，短径4.3mの楕円形を呈する。

床：床面はほぼ平坦で，特に硬化した部分は認められない。

壁：軟弱でゆるい傾斜をもつ。

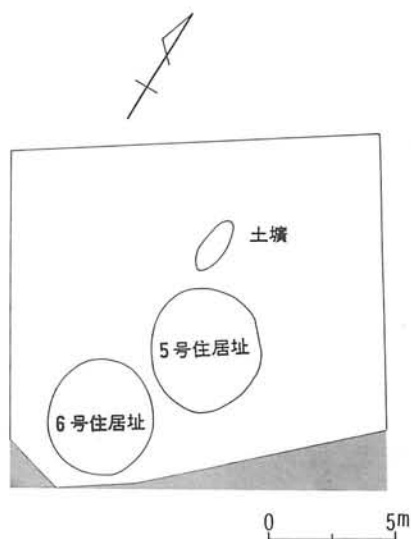
柱穴：壁にそってP₁，P₄～P₇がほぼ等間隔に存在する。深さは50～70cm前後。南側には埋甕が検出され脇から約20cmの柱穴が2本存在。

炉：住居址のほぼ中央に径80×60cmの楕円形地床炉が存在する。口縁部と胴下半部以下を欠く土器(第5図2)が埋設されている。

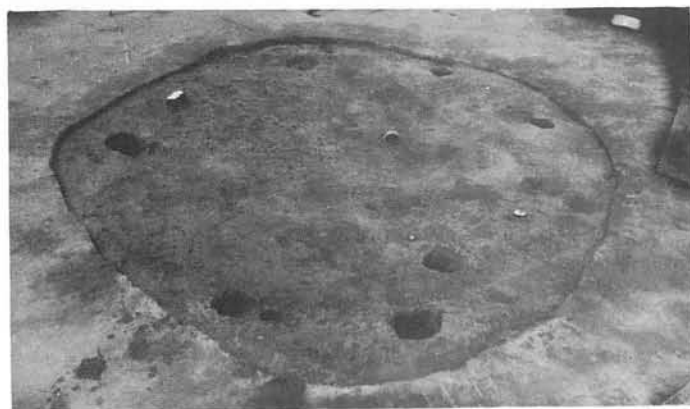
出土した土器(第5～6図)

第5図1は，5号住居址の南壁に近いピット3のわきから出土した床面直上の土器である。口縁部がくの字状に外反する深鉢で，頸部が括れ波状の隆帯文がめぐる。胴部は縦位の隆帯文によって構成され，地文に斜状の沈線が施文されている。口縁部の径は25cm内外と推定される。2は，炉に埋設された土器で，口頸部に波状の隆帯文をめぐらし，その下位を縦位の隆帯による区画で構成しており，地文に縄文が施されている。炉で使用されたため，二次焼成をうけ，器壁にはじけた痕が認められる。現存部での最大径は14cmである。

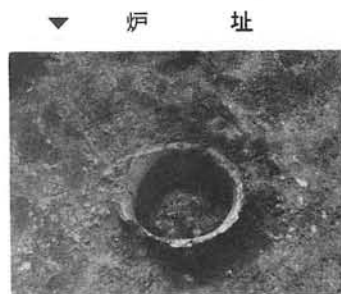
(小泉 功)



第3図 遺構分布図 (1/300)



PL. 6 5号住居址



5 号 住 居 址



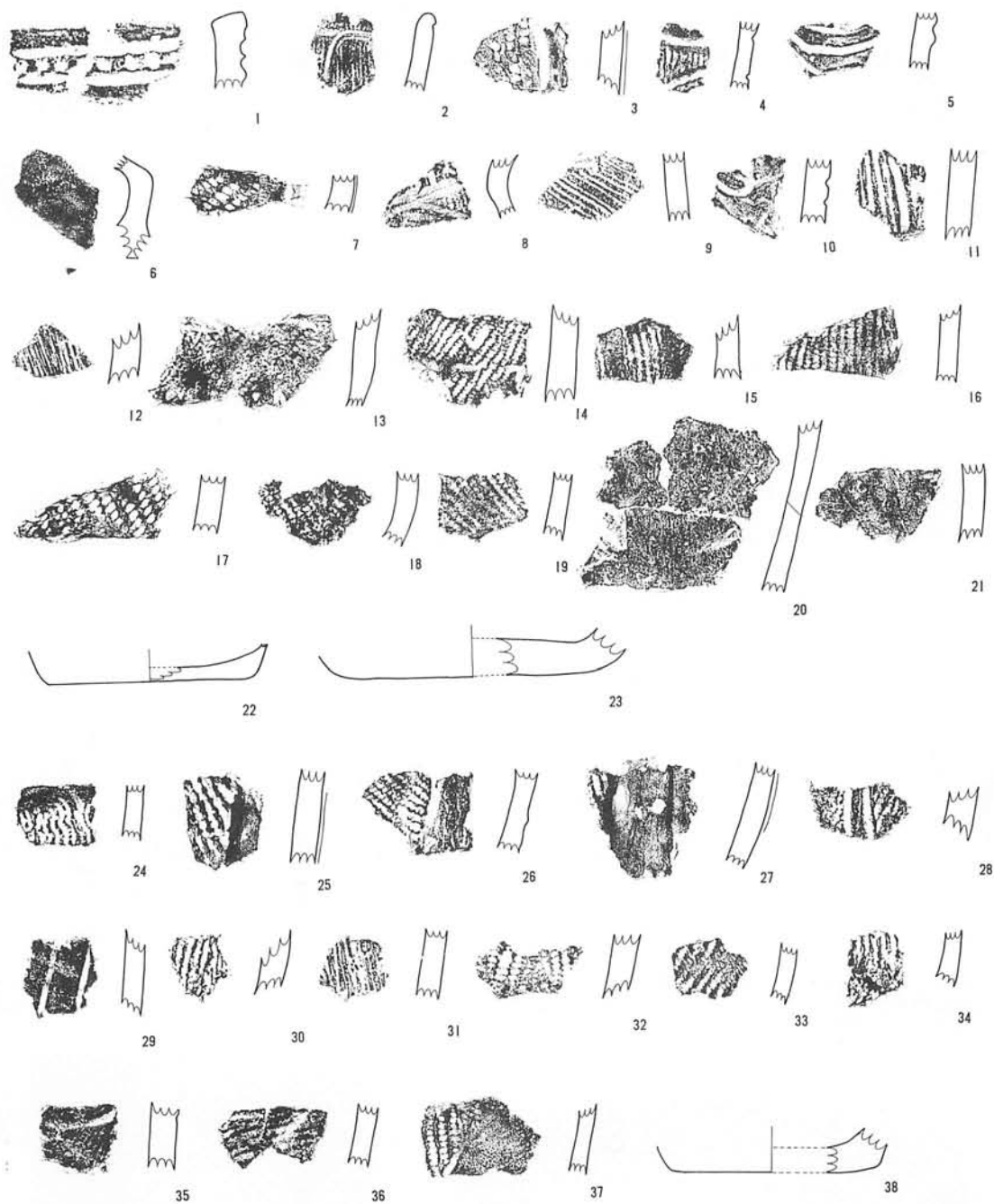
第 4 図 5 号住居址・土壙 (上)

5号住居址出土の土器

図番	器名	備考
第1		土中 // // 、

第5図 5号住居址出土土器 (4)

5 号住居址



第 6 图 5 号住居址・土壙出土土器 (1/3)

6号住居址(第7～16図)

保存状態：上面に一部攪乱がみられたが保存状態は比較的良好である。

覆土：黒褐色土(第1層)を基本に堆積しており、全体としてしまりがある。床上部(第3層)はロームブロックを含み、色調もやや明るい。

規模と形態：長径4.5 m, 短径4.1 mのほぼ円形を呈する。

床：しまりはあるが特に硬化した部分は認められない。ほぼ平坦である。

壁：壁高は15～20cmで、西側では急にたちあがるが他ではゆるやかに傾斜をもったたちあがる。

柱穴：計5口の小穴が検出され、いずれも柱穴と考えられる。P₅がやや小形であるが、他は径も大きく、深さも44～52cmあり、しっかりとしている。P₅は南側にあたり住居址の玄関施設に付帯するものであろう。

炉：住居址の中央よりも北側に径70～80cmの橢円形の炉が検出された。石囲い炉である。(第8図)。16個の礫が残存していた。緑泥片岩製石皿(第17図4), 砂岩小形礫によって石囲いが構成されているがくずれて検出された。焼土は硬化した部分で約5 cm堆積している。

遺物の出土状態：炉を中心として分布がみられる。壁際出土の遺物は稀である。大部分が覆土上部に集中し、床面直上出土は少ない。全体的に遺物量は少ない。

出土した土器：本住居址から推定復元可能資料は第10図の5点である。他はすべて破片である。総数537片のうち140片を図示した。器形は、ほとんど深鉢である。

出土した石器：打製石斧6点(第15図1・2・4, 第16図1～3), 磨石1点(第15図3), 石皿1点(第16図4)の他、黒曜石の剥片2点、礫器の断片等総数15点と少量であった。(坪田 幹男)

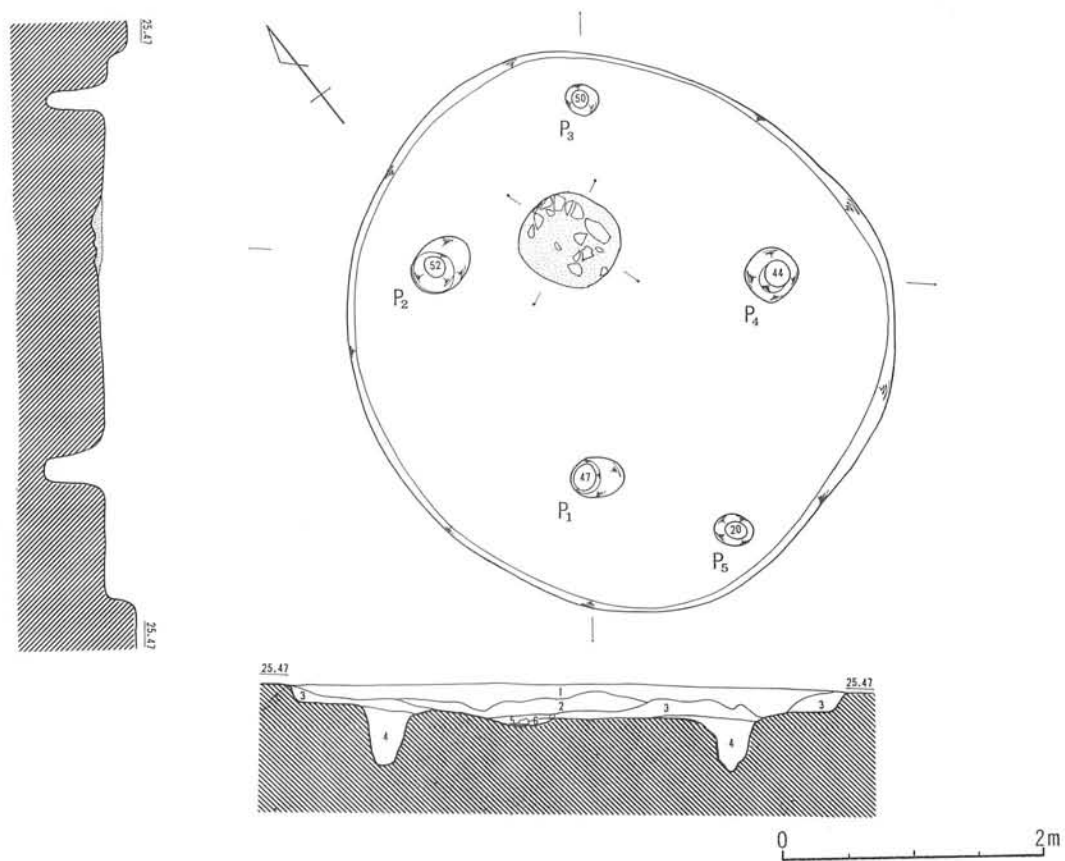


PL. 8 6号住居址

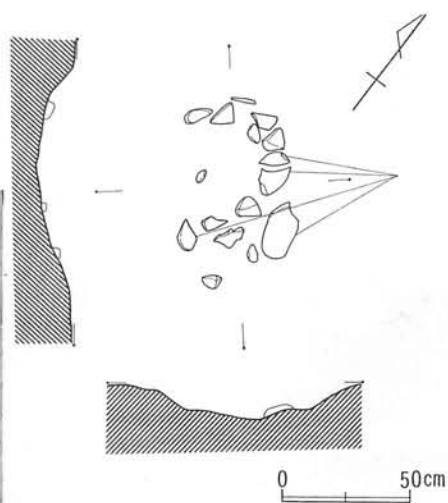
▼ 炉 址



6 号住居址

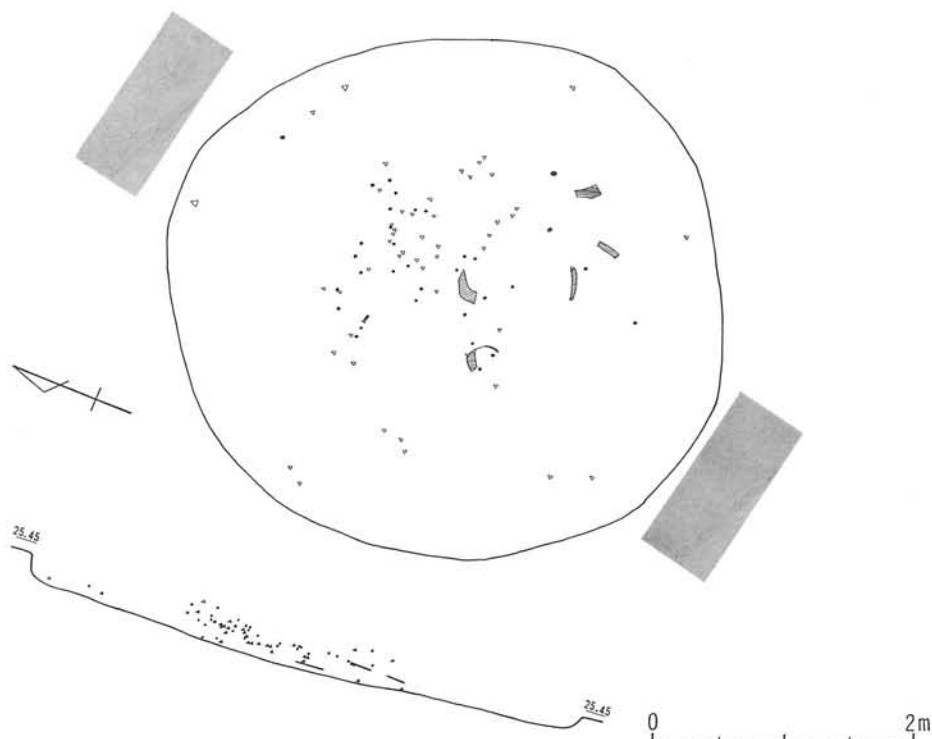


第 7 图 6 号住居址 (1/60)



PL. 9 6 号住居址遺物出土状態

第 8 图 炉 址 (1/30)



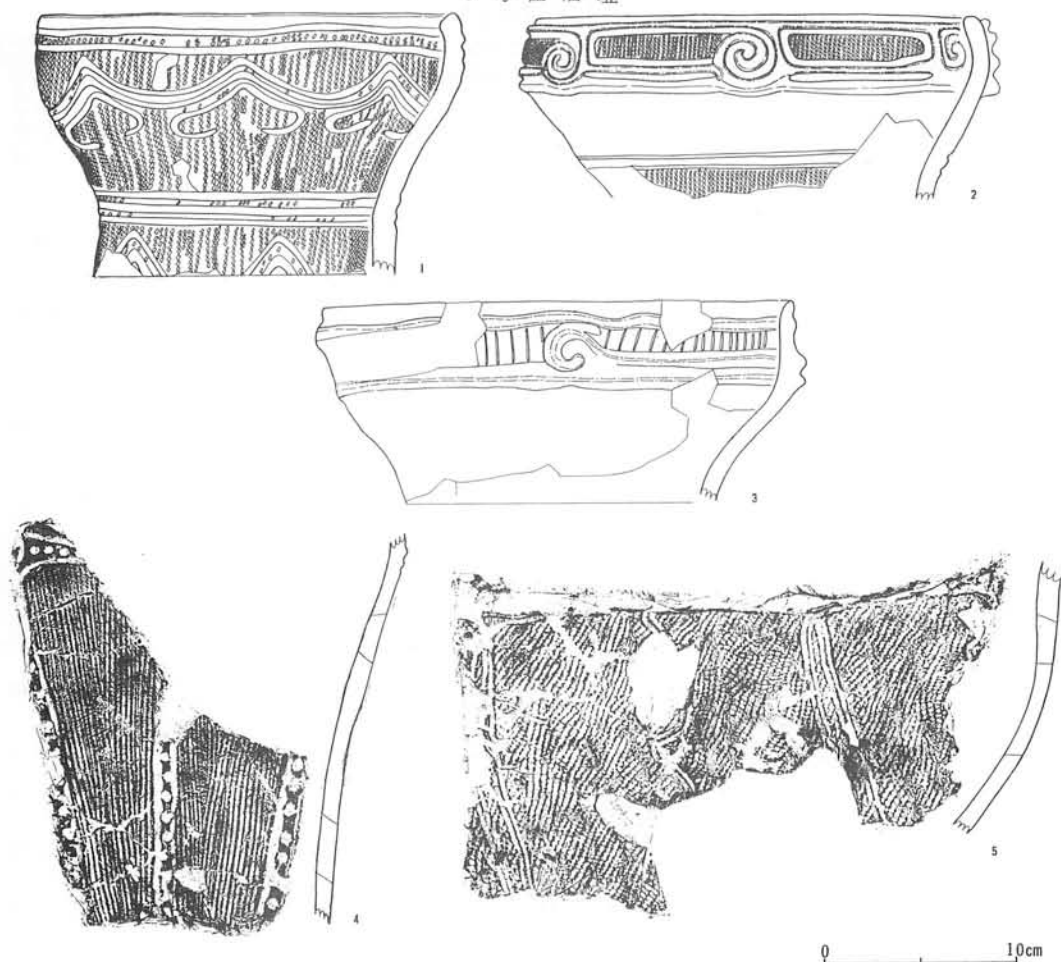
第9図 6号住居址遺物出土状態 (a)

出土した土器(第10~14図)

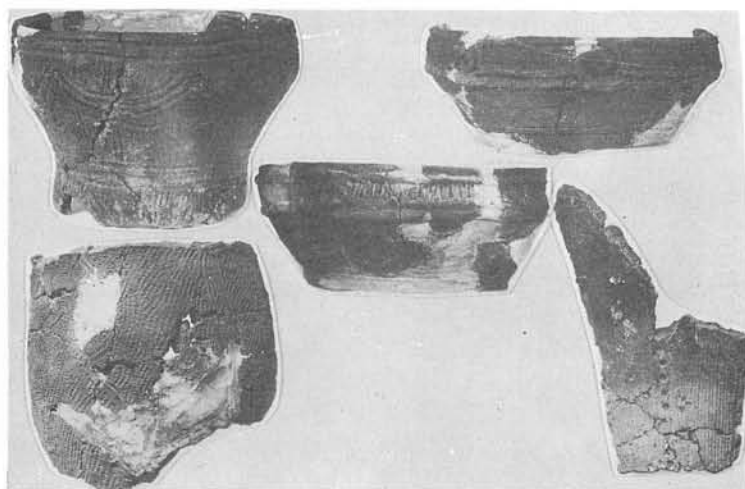
6号住居址の床面直上の土器で完形にちかいものは5個体分であった。第10図1は、6号住居址の中央部東よりの床面直上から出土した土器である。口縁部が内彎するキャリバー形の深鉢で、口縁部に横位の2条の沈線と連弧文が、頸部から胴部には、横位の5条の沈線と連弧文がめぐりこれらの文様帯によって構成されているが、地文には縄文が施されている土器である。口縁部の径は21.5cmである。2は、住居址の中央の床面直上から出土した土器で、口縁部が内彎するキャリバー形の深鉢である。口縁部に渦巻文を中心に区画文があり、その下位に無文帯がめぐる。さらに胴部にちかい位置に2条の沈線がめぐり、縄文が施されている。口縁部の径は23cmである。3は、住居址の東南部で床面直上から出土した土器で、渦巻文が簡略化され区画内に粗い条線が施され、区画文の下位は無文帯で、胴部よりの位置に沈線がめぐっている。口縁部はおおむね直立し、口径25cmを有する土器で下半分を欠いている。4は、住居址の中央部南よりの床面直上から出土した土器である。口縁部を欠く胴部を主体とする土器で、胴部の上位に円形の竹管文が、また縦位にも同じ円形竹管文が下部に向かって施され、地文の条痕を区画する構成からなっている。5は、住居址の中央部床面近くから出土した、大形土器の胴部破片である。単節の縄文が地文として全体に施され、懸垂文のあるもので、三段の接合部が認められるものである。

(小泉 功)

6 号住居址



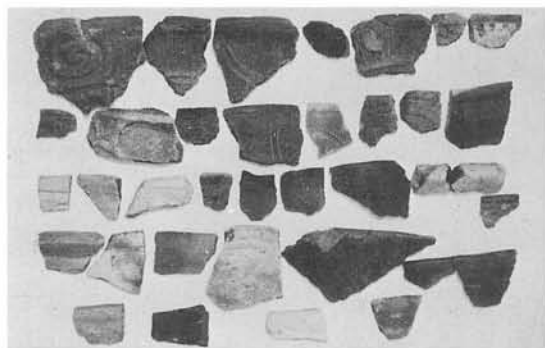
第10图 6号住居址出土土器(1) (4)



PL. 10 6号住居址出土土器

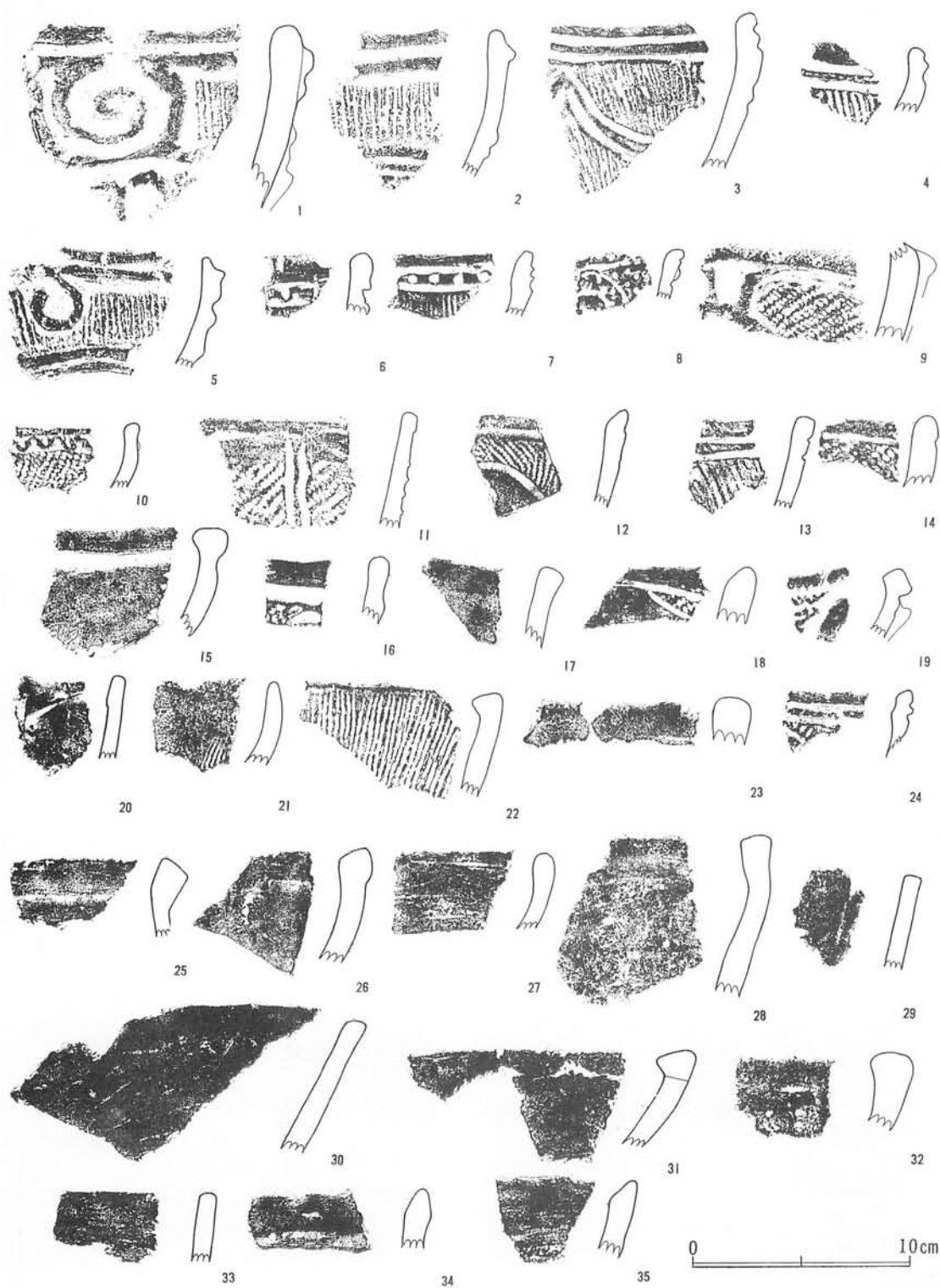
Ⅲ．発見された遺構と遺物

番 号	器 形	部 位	文 様 構 成 特 徴	内 面 調 整
第11図	1 深鉢	鉢	線	研
2 深鉢	鉢	鉢	線	磨
3 深鉢	鉢	鉢	線	磨
4 深鉢	鉢	鉢	線	磨
5 深鉢	鉢	鉢	線	磨
6 深鉢	鉢	鉢	線	磨
7 深鉢	鉢	鉢	線	磨
8 深鉢	鉢	鉢	線	磨
9 深鉢	鉢	鉢	線	磨
10 深鉢	鉢	鉢	線	磨
11 深鉢	鉢	鉢	線	磨
12 深鉢	鉢	鉢	線	磨
13 深鉢	鉢	鉢	線	磨
14 深鉢	鉢	鉢	線	磨
15 深鉢	鉢	鉢	線	磨
16 深鉢	鉢	鉢	線	磨
17 深鉢	鉢	鉢	線	磨
18 深鉢	鉢	鉢	線	磨
19 深鉢	鉢	鉢	線	磨
20 深鉢	鉢	鉢	線	磨
21 深鉢	鉢	鉢	線	磨
22 深鉢	鉢	鉢	線	磨
23 深鉢	鉢	鉢	線	磨
24 深鉢	鉢	鉢	線	磨
25 深鉢	鉢	鉢	線	磨
26 深鉢	鉢	鉢	線	磨
27 深鉢	鉢	鉢	線	磨
第12図	1 深鉢	鉢	線	研
2 深鉢	鉢	鉢	線	磨
3 深鉢	鉢	鉢	線	磨
4 深鉢	鉢	鉢	線	磨
5 深鉢	鉢	鉢	線	磨
6 深鉢	鉢	鉢	線	磨
7 深鉢	鉢	鉢	線	磨
8 深鉢	鉢	鉢	線	磨
9 深鉢	鉢	鉢	線	磨
10 深鉢	鉢	鉢	線	磨
11 深鉢	鉢	鉢	線	磨
12 深鉢	鉢	鉢	線	磨
13 深鉢	鉢	鉢	線	磨
14 深鉢	鉢	鉢	線	磨
15 深鉢	鉢	鉢	線	磨
16 深鉢	鉢	鉢	線	磨
17 深鉢	鉢	鉢	線	磨
18 深鉢	鉢	鉢	線	磨
19 深鉢	鉢	鉢	線	磨
20 深鉢	鉢	鉢	線	磨
21 深鉢	鉢	鉢	線	磨
22 深鉢	鉢	鉢	線	磨
23 深鉢	鉢	鉢	線	磨
24 深鉢	鉢	鉢	線	磨
25 深鉢	鉢	鉢	線	磨
26 深鉢	鉢	鉢	線	磨
27 深鉢	鉢	鉢	線	磨



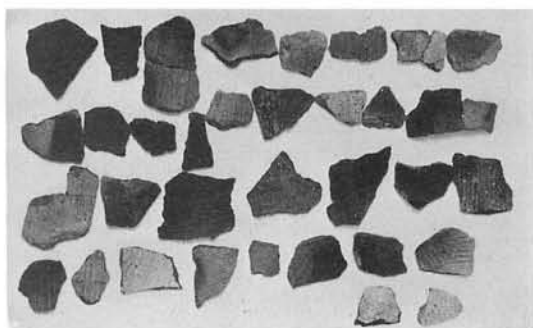
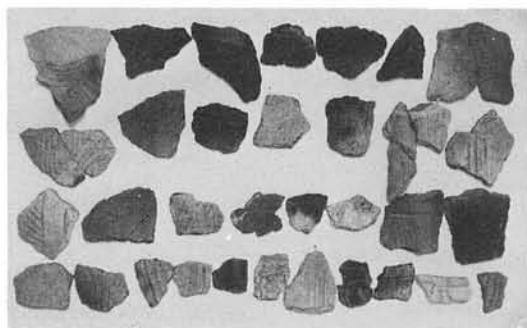
PL. 11 6号住居址出土土器

6 号住居址

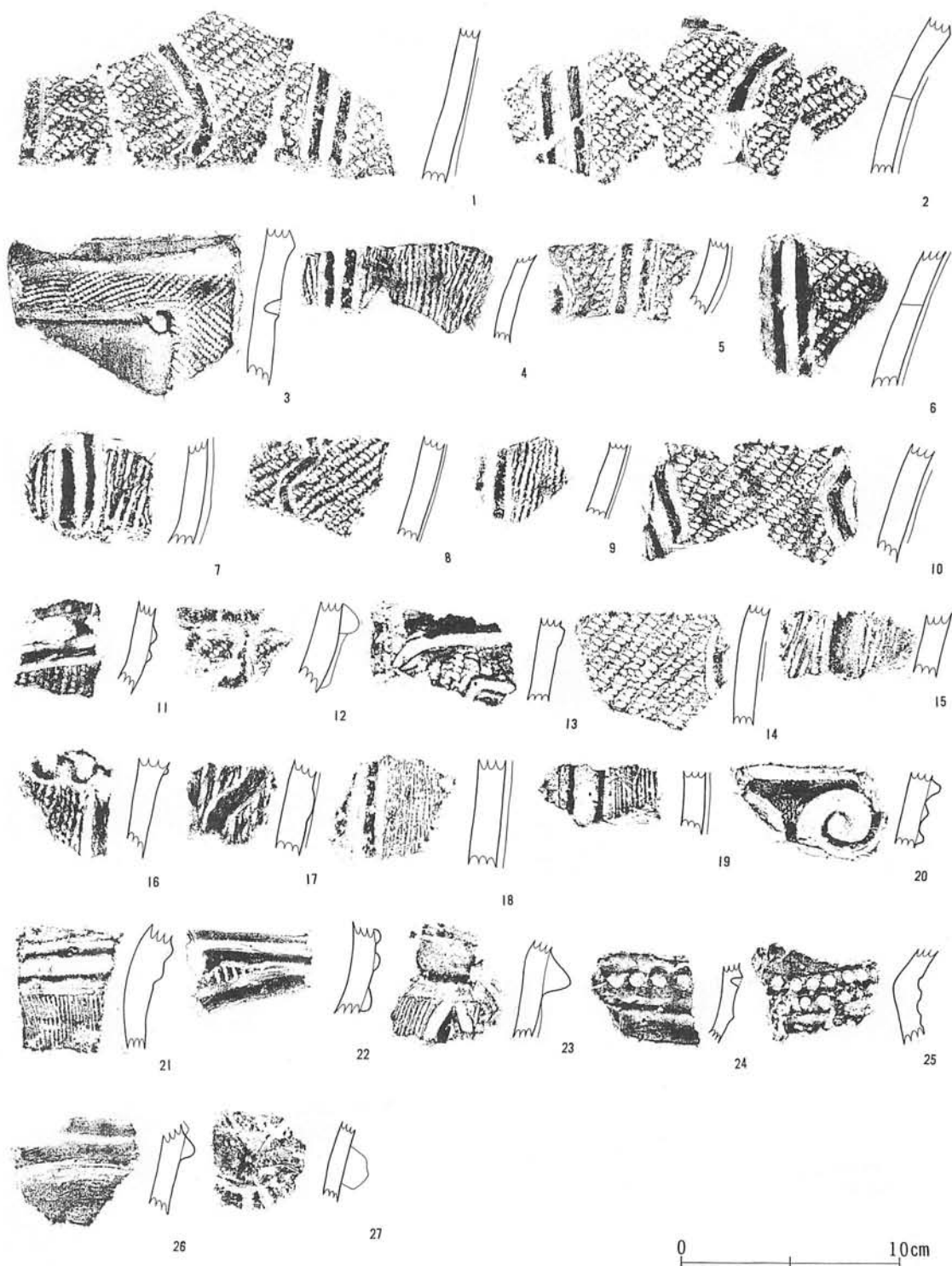


第 11 图 6 号住居址出土土器(2) (1/8)

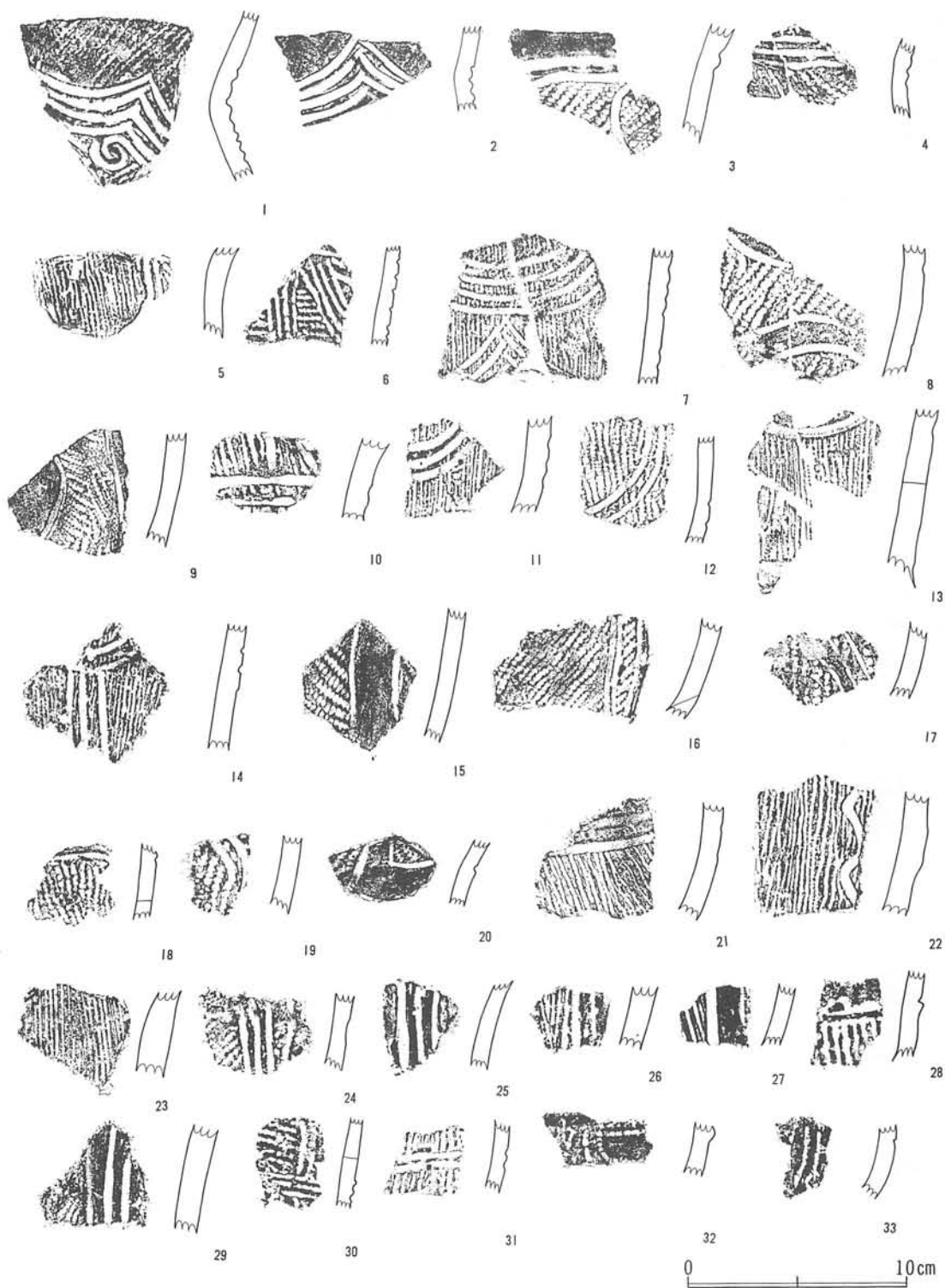
Ⅲ．発見された遺構と遺物

[illegible]

PL. 12 6号住居址出土土器

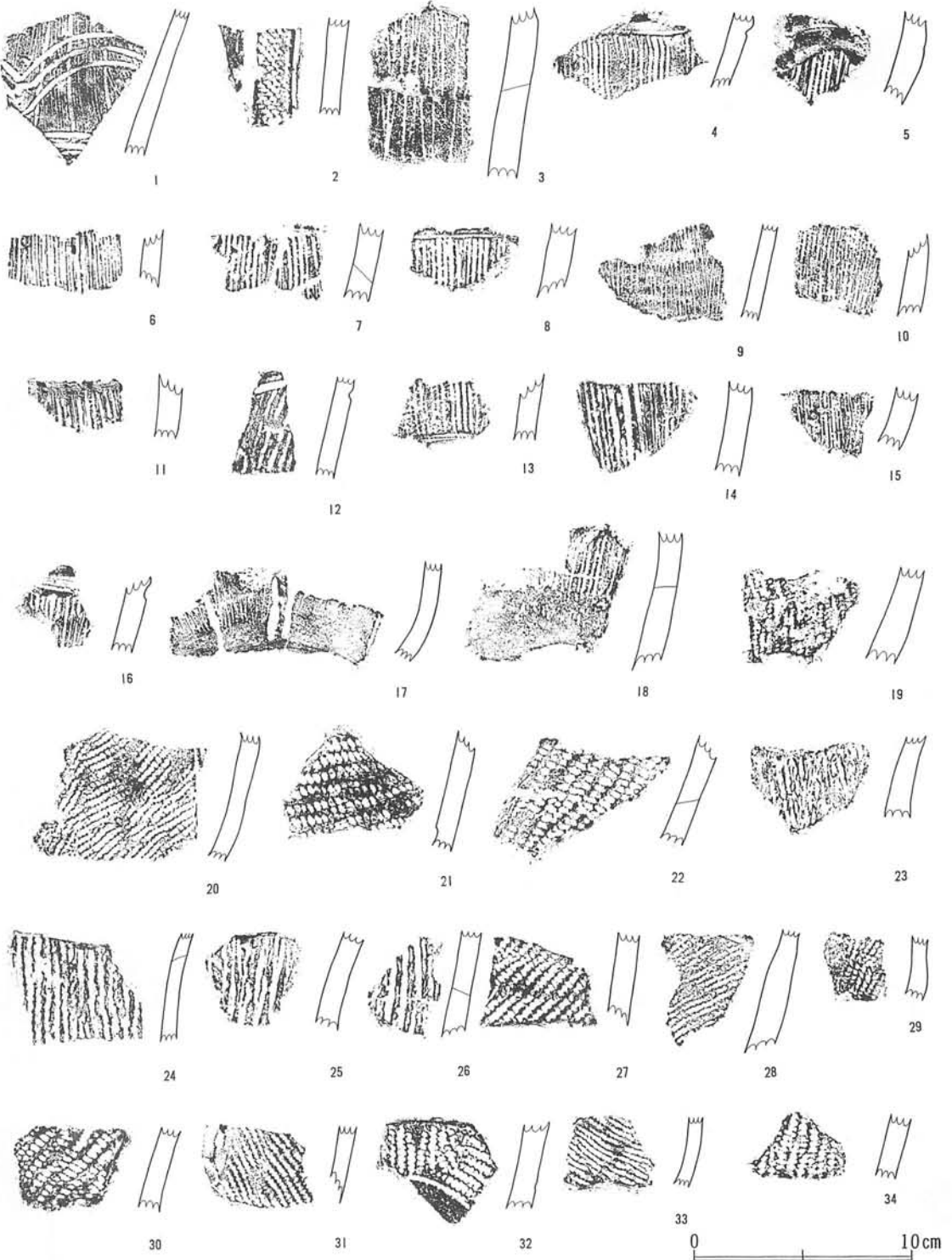


第 12 图 6 号住居址出土土器(3) (1/3)



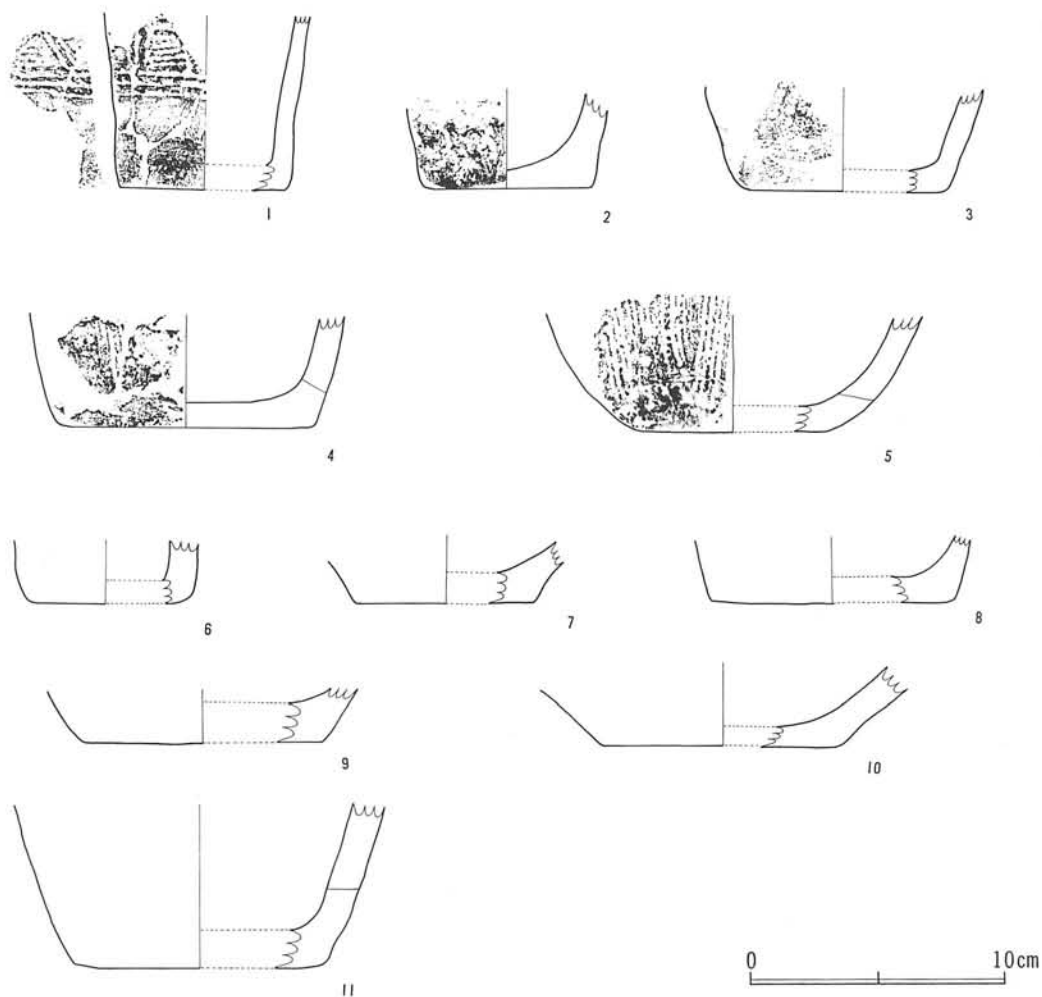
第13図 6号住居址出土土器(4) (1/3)

6 号住居址



第 14 图 6 号住居址出土土器(5) (1/3)

Ⅲ．発見された遺構と遺物



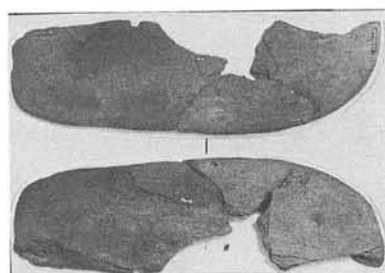
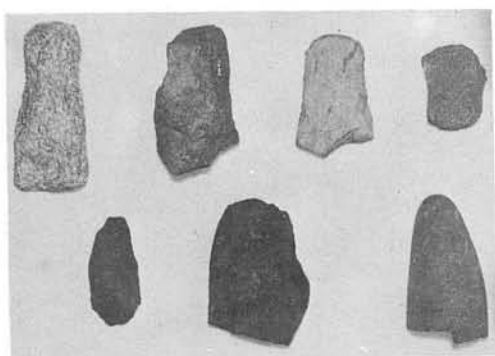
第 15 図 6 号住居址出土土器(6) (1/8)

番 号	器 形	部 位	文 様 構 成 特 徴	内 面 調 整
第 15 図 1	深 鉢	底 部	刺 突 文 径 6.5 cm	研 磨
2	深 鉢	底 部	縄 文 // 6.7 cm	
3	深 鉢	底 部	縄 文 // 8.3 cm	
4	深 鉢	底 部	縄 文 // 10.2 cm	
5	深 鉢	底 部	条 痕 // 7.7 cm	
6	深 鉢	底 部	// 6.4 cm	
7	深 鉢	底 部	// 7.2 cm	
8	深 鉢	底 部	// 9.7 cm	
9	深 鉢	底 部	// 9.5 cm	
10	深 鉢	底 部	// 9.3 cm	研 磨
11	深 鉢	底 部	// 10.0 cm	

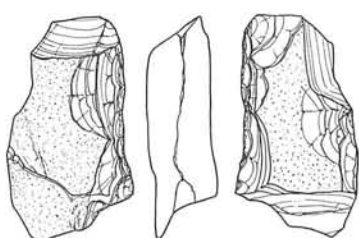
6 号 住 居 址

出土した石器

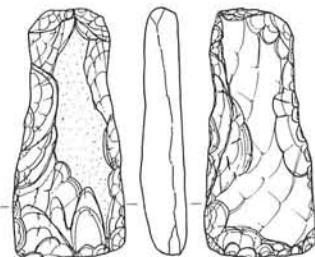
図番	種 別	出土層序	石 質	遺存状態	重量 ϕ	自然面の有無	備 考
第16図 1	打製石斧	床直上	凝灰質泥岩	半欠	(125)	片面	
2	打製石斧	床直上	凝灰岩	完形	101	ナシ	両側縁敲打痕あり
3	敲石	覆土	砂岩	半欠	(155)		擦痕あり、 破砕により赤褐色を呈する
4	打製石斧	床直上	硬質砂岩	半欠	(140)	ナシ	両側縁敲打痕あり
第17図 1	打製石斧	覆土	泥岩	一部欠損	(43)	片面	両側縁敲打痕あり
2	スクレーパー	床直上	砂岩	完形	24	ナシ	両側縁に粗い調整
3	打製石斧	覆土	頁岩	完形	21	ナシ	側縁に敲打痕あり
4	石皿	炉石	緑泥片岩	半欠			片面石皿・両面凹石



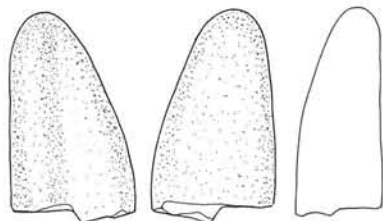
PL. 13 6号住居址出土石器



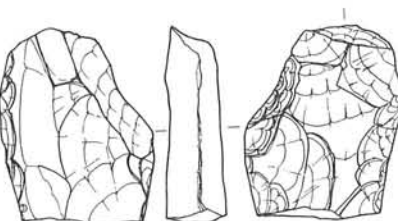
1



2



3

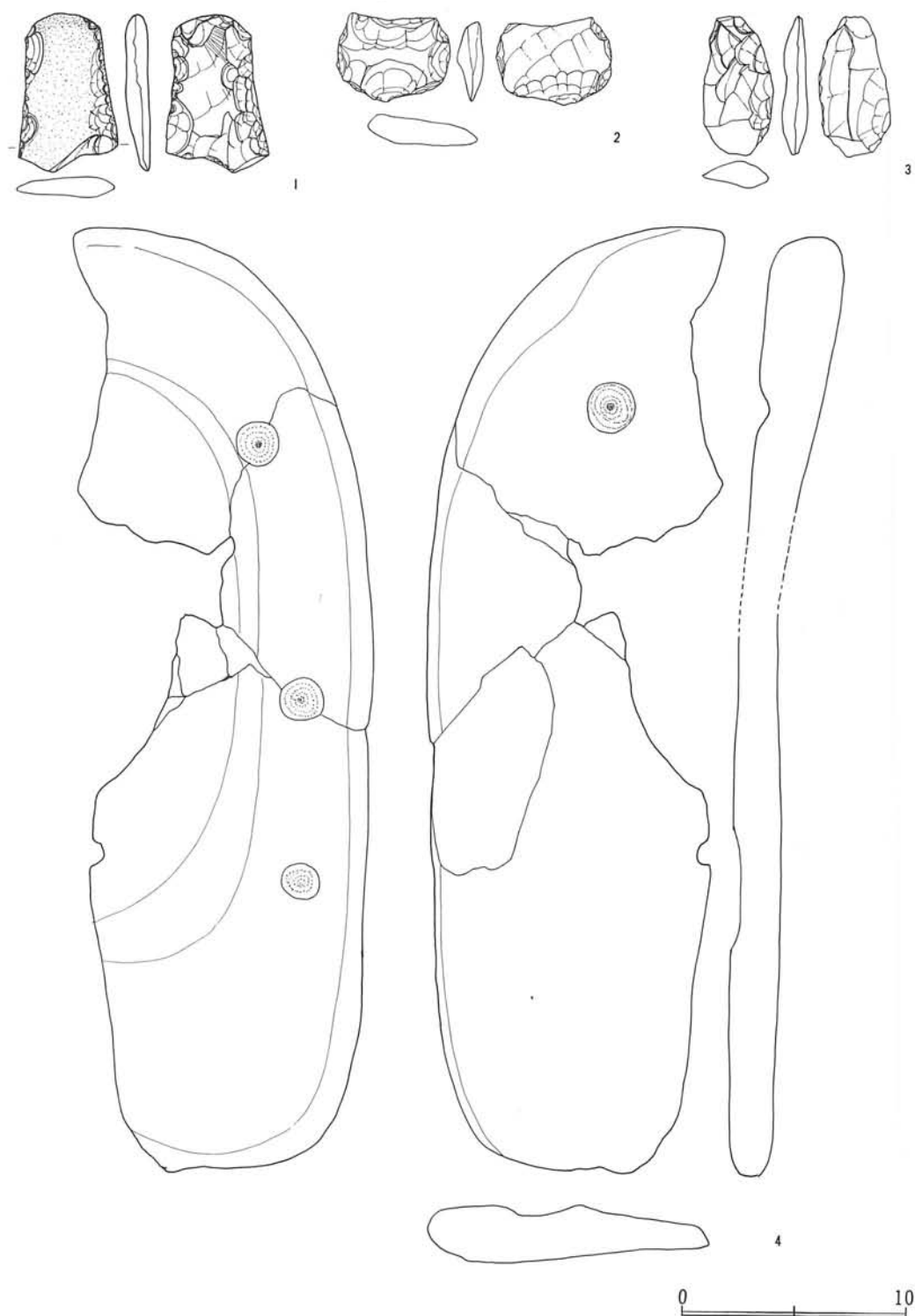


4

0 10cm

第 16 図 6 号住居址出土石器(1) (1/3)

Ⅲ．発見された遺構と遺物

第 17 図 6 号住居址出土石器(2) ($\frac{1}{8}$)

土 壙

土 壙(第4・6図)

覆土：上部に暗褐色土が堆積しており，下部にいくにしたがって黄褐色土に変化してゆき，下部はロームブロックが混入する。

規模と形態：長径2.2m×短径0.9mの長楕円形を呈する。深さは15cmを測る。壙底の中央部に凹みがある。

遺物：14点の土器が出土。うち6点図示(23～28)。



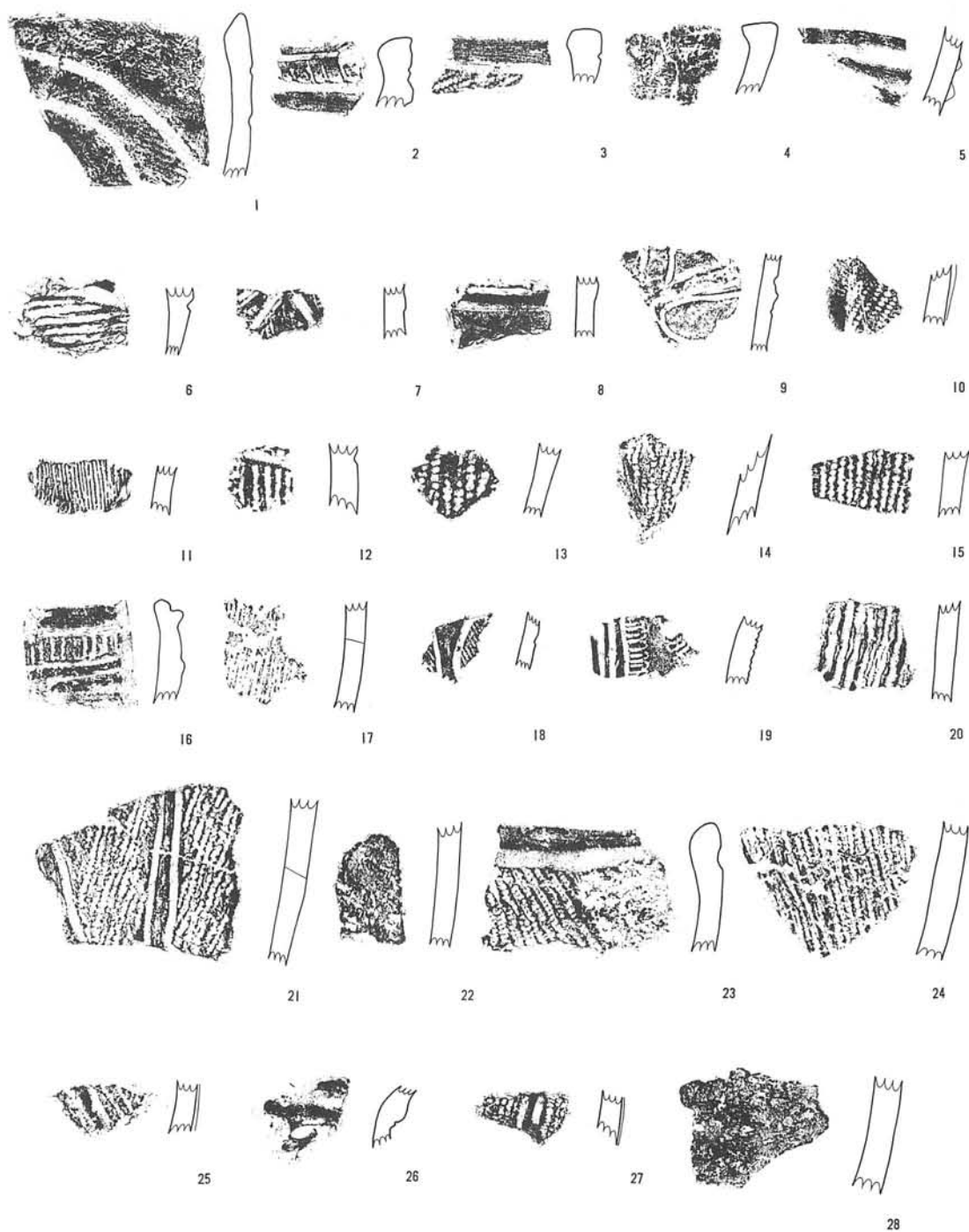
PL. 14 土 壙

図 番	器 形 ・ 部 位	文 様 の 特 徴	内面調整	備 考
第6図 23	深鉢 口縁部	沈線と縄文	研 磨	土 壙 出 土
24	深鉢 胴部	縄文		土 壙 出 土
25	深鉢 胴部	隆帯と縄文		土 壙 出 土
26	深鉢 頸部	沈線と縄文		土 壙 出 土
27	深鉢 胴部	沈線と縄文		土 壙 出 土
28	深鉢 胴部	無文		土 壙 出 土

遺構外出土土器(第18図)

図 番	器 形 ・ 部 位	文 様 の 特 徴	内面調整	備 考
第18図 1	深鉢 口縁部	沈線と円形竹管文	研 磨	包 含 層
2	深鉢 口縁部	沈線と条痕		//
3	深鉢 胴部	沈線と隆帯・縄文		//
4	深鉢 片部	沈線と縄文	研 磨	//
5	深鉢 胴部	沈線		//
6	深鉢 口縁部	無文 磨消	研 磨	//
7	深鉢 胴部	隆帯と縄文 磨消		//
8	深鉢 頸部	縄文と磨消	研 磨	//
9	深鉢 胴部	条痕		//
10	深鉢 胴部	沈線		//
11	深鉢 胴部	条痕		//
12	深鉢 胴部	条痕		//
13	深鉢 胴部	縄文	研 磨	//
14	深鉢 胴部	縄文	研 磨	//
15	深鉢 胴部	縄文		//
16	深鉢 胴部	縄文		//
17	深鉢 胴部	縄文		//
18	深鉢 胴部	縄文		//
19	深鉢 胴部	縄文		//
20	深鉢 胴下部	無文		//
21	深鉢 胴下部	無文		//
22	深鉢 底部	径 8.6 cm # 1 1.5 cm		//
23	深鉢 底部			//
24	深鉢 片部	波状平行沈線	研 磨	表 土
25	深鉢 胴部	隆帯と縄文		//
26	深鉢 胴部	磨消と縄文		//
27	深鉢 胴部	隆帯・磨消と縄文	研 磨	//
28	深鉢 胴部	沈線と縄文		//
29	深鉢 胴部	沈線	研 磨	//
30	深鉢 胴部	縄文		//
31	深鉢 胴部	縄文		//
32	深鉢 胴部	縄文	研 磨	//
33	深鉢 胴部	縄文	研 磨	//
34	深鉢 胴部	縄文		//
35	深鉢 胴部	沈線と縄文		//
36	深鉢 胴部	縄文	研 磨	//
37	深鉢 胴部	縄文	研 磨	//
38	深鉢 底部	径 9.2cm		//

Ⅲ 発見された遺構と遺物



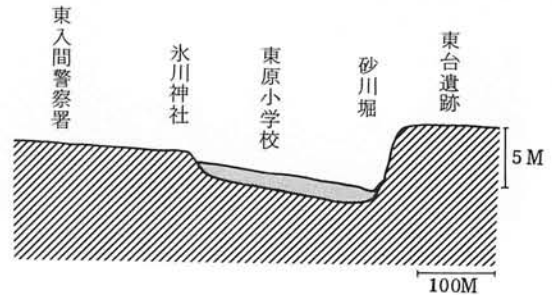
0 10 cm

第 18 図 遺構外出土土器 (1/3)

IV 東台付近の地質

調査 東台遺跡の発掘に伴い、深さ3.2 mのテストピット、及びハンドオーガーによるボーリング(5.6 m)を主に行った。資料は10cmごとに採取し、分析をした。

地形 東台は砂川堀の南側に沿って広がる台地の一部で、北側の低地—砂川堀が形成した沖積層—との比高が5~7 mあり、急な斜面となって低地に接する。北西—南東方向の断面は表Iのようになる。



第19図 東台遺跡周辺の地形断面図

関東ローム層について、武蔵野台地を構成しているのは主に関東ローム層であるが、これはさらに上位から立川ローム層、武蔵野ローム層、下末吉ローム層に分けられる。東台には上位の2層が分布する。

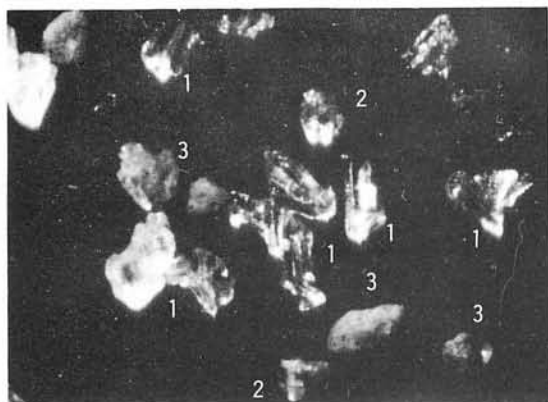
立川ローム層は主に古富士火山の噴出物である。このローム層中には、しばしば暗色帯—BB—と呼ばれる带状層が認められる。暗色帯中には有機炭素や窒素が多く含まれ、腐植酸も上部の黒土層に似ていることから、この層ができた当時の気候、植生などの環境が現在に近いと考えられている。この暗色帯は立川ローム層中に2本見られる場合もあり、上部のものを第1暗色帯($15800 \pm 400 \text{C}^{14}$ 年前)、下部のものを第2暗色帯($24900 \pm 900 \text{C}^{14}$ 年前)と区別する。またこの両暗色帯の間には、始良、丹沢火山灰層($21,000 \sim 22,000 \text{C}^{14}$ 年前)—AT—がはさまれる。これは遠く九州から飛んで来たもので、東北地方にまで及ぶ広域火山灰であるため年代を比較する上で重要な示標となっている。

武蔵野ローム層は、上部が古富士火山、下部が箱根火山を供給源としている。下部に東京軽石層($46,000 \sim 49,000 \text{F}$ 年前)—TP—をはさむ。これも年代を知る上で手がかりとなる層である。

地質 東台は上から、黒色土層、ローム層、粘土層で構成されている。

黒色土層は、地表から約60cmまでの厚さをもつ腐植に富む耕作土である。この層からは縄文時代の遺物が出土する。農耕等にかく乱されている場合が多い。

ローム層は立川ローム層及び武蔵野ローム層よりなるが、両者の境界は不明瞭で確認できない。現段階では両者を分けずに、ローム層として一括しておく。ローム層の厚さは4.6 m程である。上部は黄褐色で柔らかく、厚さ20~30cmある。以下暗色帯付近までは硬質



PL. 15 ローム中の鉱物

1. バブルウォール形のガラス(透明)
2. カンラン石(藍色)
3. 風化物(光らないで藍色)

東京軽石層は確認されていない。

粘度層は、全体に黄褐色で、所々うぐいす色(青灰色)の部分があり、シルトを主としている。また、数mm～3cmの小石、軽石等も含まれている。厚さについては確認できない。

鉱物組成 (表I, II)

今回は主にローム層について、洗い出しを行ない、偏光顕微鏡による鑑定分析をした。特徴としては、先ず110～130cmにおいてガラスが非常に多いことがあげられる。このガラスは、始良、丹沢火山灰層の特徴である板状、曲面状をしたバブルウォール型と呼ばれるもので、九州を広く被うシラス台地を構成しているものと同一である。

次に、160cmと170cmを境に鉱物組成が変化していることがあげられる。長石は20%前後から50%前後へ大きく増え、しそ輝石、普通輝石、磁鉄鉱などは減少している。

なお、暗色帯については、鉱物組成的特徴があるとはいえない。

含水率 (表III)

採取した資料の重さ — W 乾燥させた資料の重さ — W'

$$\frac{W - W'}{W} \times 100 = \text{含水率} \quad \text{ただし乾燥は、乾熱器を用い } 105^{\circ}\text{C} \text{ でひと晩加熱した。}$$

ローム層は、48～57%の含水率で、きわめて水もちがよいと言える。上部と下部、柔らかい部分と硬い部分などで著しい差はない。

粘度層については、20～30%であり、ローム層より低い。

今後 今回は露頭での調査ができないため、ロームの分析が主になった。本地域の調査だけでは地質学的面は論じにくい、当地域の自然史と人類史の接点をとらえる上で、目安になると考えられる。今回、上部の黒土層については詳しく調べなかったが、黒土層中にも時代を知る上で重要な火山灰 — アカホヤ火山灰(6000～6500C¹⁴年前) — が存在する可能性がある。今回確認できなかった東京軽石層と、この火山灰層を今後の調査で確認したい。

(清水象次郎)

である。深さ120cm付近には、始良、丹沢火山灰層をはさんでいるが、肉眼で確認することはできない。(顕微鏡鑑定により確認)暗色帯は135cm～160cmに1本明瞭なものが認められる。始良、丹沢火山灰層の下部に存在するため、第2暗色帯とする。なお、先土器時代の遺物は、ローム上部からこの第2暗色帯までの間に出土する。ローム層下部はいくぶん粘土質で、下部の粘土層とは漸移的な関係にある。また、今回のボーリングでは、

表1 関東ロームの鉱物組成

大井町東台遺跡												
極細粒($\frac{1}{8} \sim \frac{1}{16}$ mm)												
深さ cm	軽 鉱 物			重 鉱 物						小 計	そ の 他	計
	石	長	ガ ラ ス	かんらん 石	しそ輝 石	普通輝 石	角 閃 石	黒 雲 母	磁 鉄 鉱			
	英 石	石	計						計			
10												
20												
30												
40		45.3	16.6	61.9	10.8	15.1	2.1	0.2	9.8	38.0	0.1	100
50												
60												
70		31.3	9.4	40.7	23.1	19.9	2.9	0.6	12.6	59.1	0.2	100
80		37.4	7.8	45.2	11.5	25.4	6.4	0.3	10.9	54.5	0.3	100
90		15.2	5.6	20.8	24.2	28.4	6.4	0.2	20.0	79.2		100
100		32.9	0.3	33.2	19.7	27.2	5.3	0.3	14.0	66.5	0.3	100
110	0.3	25.1	12.8	38.2	13.9	29.3	5.2		12.0	60.4	1.4	100
120		8.4	19.5	27.9	33.1	14.2	8.4		6.2	61.9	10.2	100
130		24.7	13.1	37.8	26.2	20.0	6.3		5.9	58.4	3.8	100
140		32.2	1.8	34.0	33.3	15.0	4.0	0.6	11.9	64.8	1.2	100
150		15.1	0.2	15.3	40.9	26.3	2.3	1.1	10.7	82.4	2.3	100
160		22.8	0.8	23.6	41.8	20.0	2.5	1.0	10.1	75.4	1.0	100
170		47.7	0.4	48.1	24.3	15.1	0.4	1.6	10.3	51.7	0.2	100
180		47.8	0.5	48.3	24.4	17.4	1.6	1.6	6.2	51.2	0.5	100
190		46.3		46.3	31.7	14.4	2.9	0.6	3.5	53.1	0.6	100
200		50.5		50.5	22.7	16.2	3.0		6.1	48.0	1.5	100
210		38.9		38.9	36.8	14.2	2.2	1.3	4.3	59.5	1.6	100
220		53.4	0.6	54.0	30.5	9.3	1.6		3.4	44.8	1.2	100
230		40.0	1.6	41.6	30.9	14.9	3.7	0.5	6.8	56.8	1.6	100
240		41.8	1.9	43.7	32.6	13.3	2.8	0.6	6.4	56.0	0.3	100
250		56.3	0.5	56.8	21.1	11.2	1.3	1.0	7.8	42.4	0.8	100
260	0.3	58.1		58.4	21.2	11.5	1.8	0.6	4.1	40.1	1.5	100
270		42.3	0.3	42.6	27.4	17.3	2.8	1.6	7.0	56.1	1.3	100
280		53.0	0.3	53.3	24.0	14.5	1.6	0.8	4.7	45.6	1.1	100
290	1.0	35.1	1.3	37.4	27.4	22.1	2.3	2.6	6.7	61.1	1.5	100
300		24.4	1.5	25.9	45.5	17.3	2.4	0.9	7.7	73.8	0.3	100
310		49.1	0.3	49.4	28.7	14.5	0.9	0.9	3.8	48.8	1.8	100
320												
330												
340												
350												

表2 関東ロームの鉱物組成図

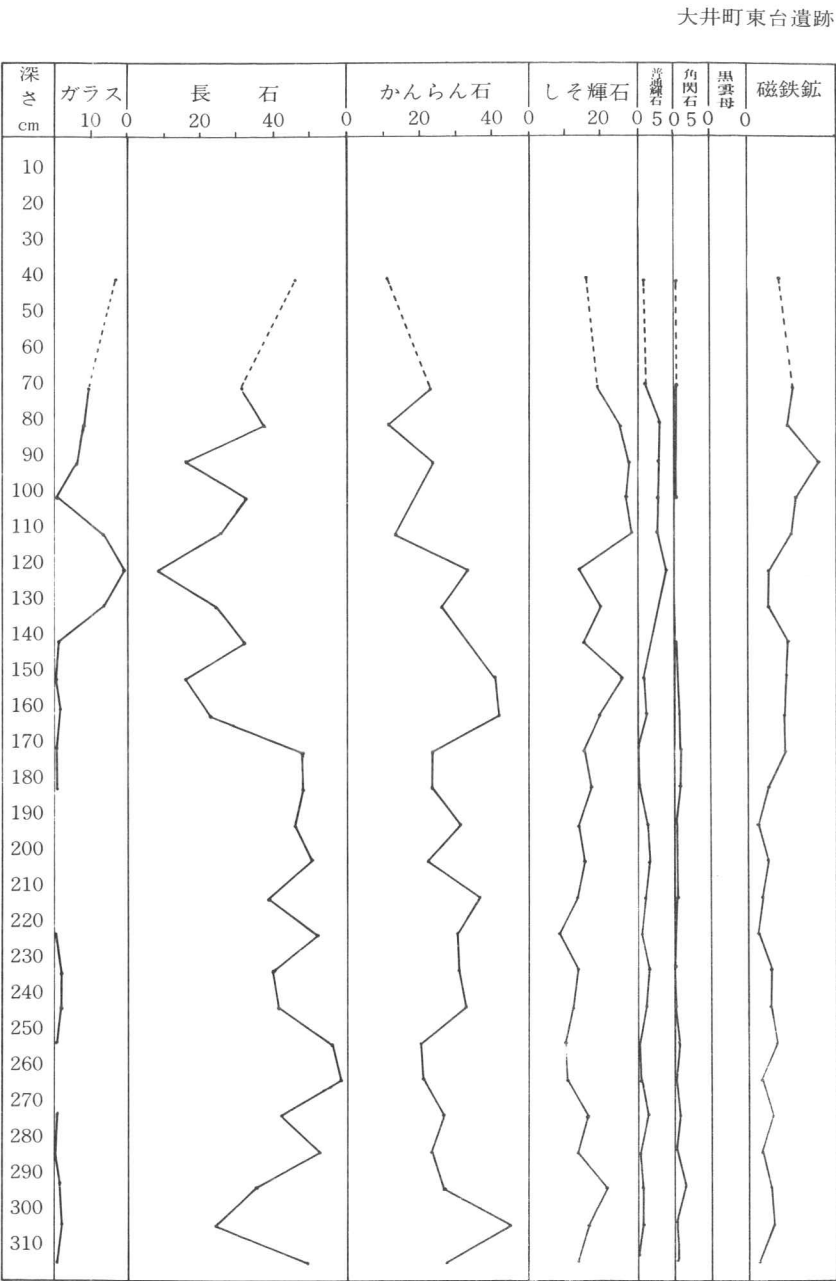
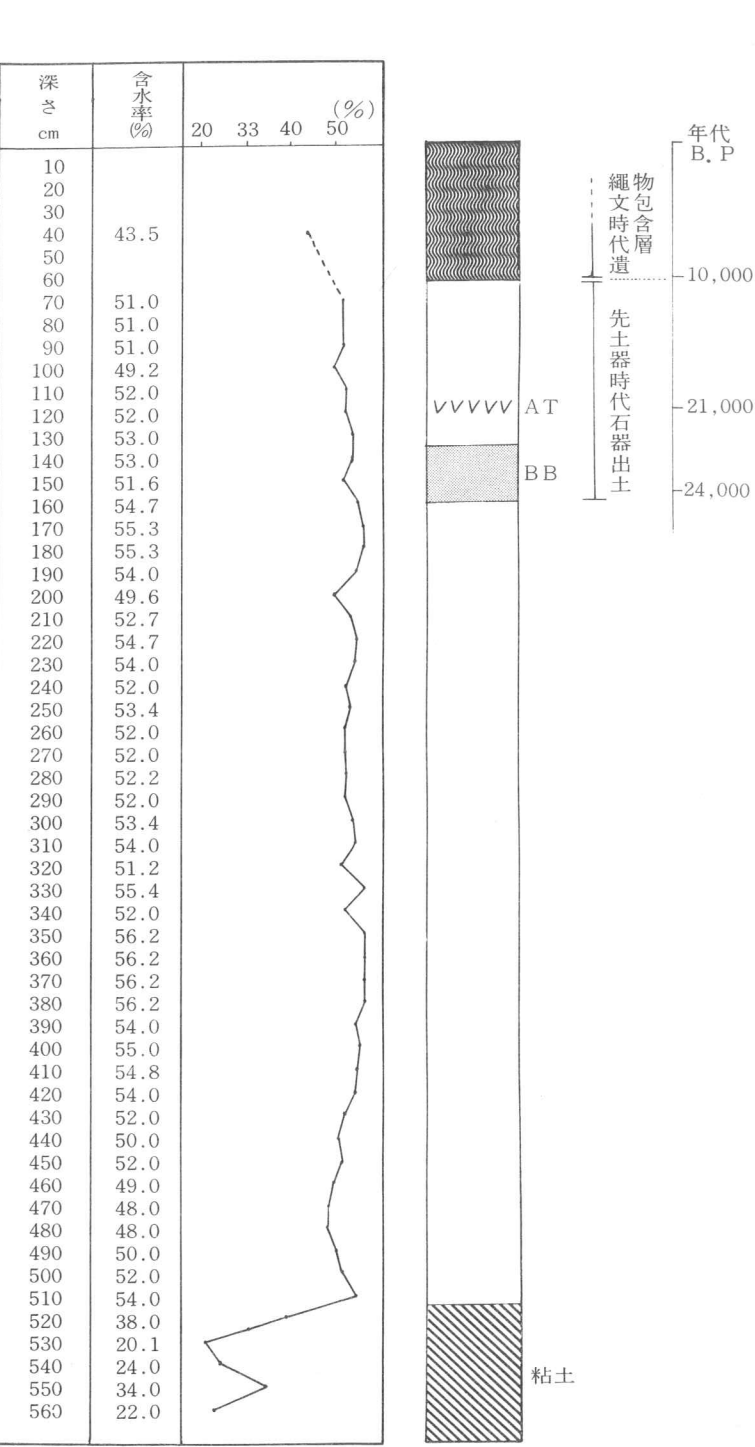


表3 含 水 率



V ま と め

今回の調査したところは、昭和57年度に発掘調査した第4地点の南隣接区で、縄文時代中期後半の遺構が前回と同様に検出された。2軒の竪穴住居址は共に一連の集落を構成する単位集団の範疇に属するものである。前回調査した1・3・4号の各住居址が加曽利EⅠ式期を主体とするもので、2号住居址のみが堀之内式土器を主体とする後期のものであった。今回調査した5号住居址は加曽利EⅡ式期の土器を主体としたもので、6号住居址は加曽利EⅠ式期の土器を主体とした時期のものである。これらの住居址伴出土器のうち1・4号の住居址は、口縁部から頸部にかけて渦巻文が描かれ、3号住居址のは無文であるが頸部から胴部に懸垂文があり、さきの4号住居址炉体土器にも胴部に懸垂文があり類似性が認められる。これらの住居址のうちで、3号住居址は炉を二つもち、二重の壁溝があり南側に拡張が行なわれている。すでに発掘された住居址の中でも最も大きく、長径7m、短径6.15mの隅丸方形の住居址である。同じ加曽利EⅠ式期でも、若干新しい時期と考えられよう。これに対し、今回の5・6号の各住居址は小形のタイプである。しかし、6号住居址の炉は石皿の破片を炉の囲石に使用しており、この遺跡の発掘された住居址の中では、炉の構造が最も堅牢にできており、焼石や焼土の量も多く、居住度の高かったことを示唆している。この東台遺跡第4地点と、その南東側の住居址(5号・6号)が共に一連の集落構成の範疇に属していることは前述したが、この東台遺跡がどのような拡張をもつものであろうか。東台遺跡はソネ川(砂川堀)の右岸の台地縁辺部(標高26m前後)に位置しているが、分布調査によると今回調査したさらに南側の鶴瀬駅方向に通じる興国コントロール工場前の道路を隔てた畑地にもかなりの量の土器の分布が認められ、遺跡が大きな拡張をもっていることを示している。西側の第1地点では、土器の分布がまばらであり遺構は認められないことから、その限界の概略を確認することができた。東側の第2地点では、12軒の住居址が検出されており、そのうち立ち上りの壁が明らかで規模のわかるものは5軒である。特に円形の4号住居址は二重の壁溝がめぐり、南北径5.1mから6.2m、東西5mから6.2mへと拡張が行なわれ完形の浅鉢が出土している。また同3号住居址は径5.1m内外で、炉の埋設土器は胴下半部を欠くが、渦巻文を主体とする加曽利EⅠ式期の深鉢である。このように当区も住居址などの密度が高いことが解る。以上のことから東台遺跡は、少なくとも直径300m以上の範囲にわたって縄文中期後半の集落遺構が存在していることが考えられ、今後の町史編さん事業を中心とする持続的な調査によってその全貌が明らかにされるであろう。

(小泉 功)

大井町史料第30集

東 台 遺 跡

(第5地点の調査のあらまし)

昭和59年 3 月 1 日 印刷

昭和59年 3 月 31日 発行

編集 大 井 町 史 編 さ ん 委 員 会

発行 大 井 町 教 育 委 員 会

〒354 埼玉県入間郡大井町大字亀久保1103-1

TEL 0492-61-2811(代表)

印刷 荻原印刷 富士見市勝瀬1595-2